



TITLE:

ジル・ドゥルーズと哲学 一多様体の論理と実践へー (Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

渡邊, 洋平

CITATION:

渡邊, 洋平. ジル・ドゥルーズと哲学 一多様体の論理と実践へー. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19792>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	渡邊洋平
論文題目	ジル・ドゥルーズと哲学 ― 多様体の論理と実践へ ―		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、20世紀フランスの哲学者、ジル・ドゥルーズ（1925-1995）の思想を論じたものである。まず序において、ドゥルーズの哲学的名著として取り上げるべき著作が『差異と反復』、『意味の論理学』、『シネマ1』、『シネマ2』、『アンチ・オイディプス』、『千のプラトー』、『哲学とは何か』、『ディアローグ』の8冊に絞られ、上記以外の著作は、これら哲学的名著の中で提示された問題を理解する手助けになる場合、あるいはさらに敷衍させることができる場合にのみ言及されるものとする。</p> <p>第1章において論文全体の立脚点が明示される。それは非人称的個体化と前個体的特異性という論点であり、これによって、ドゥルーズの哲学が一貫して非人称的な「だれかon」の世界を論じる超越論哲学であることが示される。本論文は、この非人称的かつ前個体的な領野から世界を記述する超越論哲学としてドゥルーズ、およびドゥルーズとガタリの哲学を考察するものである。第1章では、さらに「出来事événement」の概念が考察される。ストア派、ライブニッツ、ホワイトヘッドというドゥルーズによる出来事概念の系譜を跡づけるとともに、役者に関するドゥルーズの言説を確認することで、この世界に存在する個体が出来事からなる偶発的事例とみなされること、およびあらゆる存在者が差異からとらえられることが明らかにされる。こうして、一切の本質にあらがうドゥルーズの非本質主義が、存在の一義性に関する議論のうちに見出されることになる。</p> <p>第2章では映画論がまず取り上げられる。ドゥルーズにとって映画とは、非本質的なコマを一樣に並べることによって、多様な世界を描き出すとともに、主観と客観、現実と想像、現在と過去、そして真と偽すらも判別不能になるような世界を描き出す芸術だった。それによって映画は、真理の形式を「偽なるものの力puissance de faux」で置きかえるのである。こうして、映画の開示する世界は、ドゥルーズが60年代末に「プラトニズムの転倒」と呼んだものと合流すると見なされるのである。</p> <p>第3章では、「強度intensité」の概念を軸として、超越論的な創造性が世界それ自体の内に探られる。ドゥルーズは、熱力学から現象を生み出す原因としての「強度」という概念を受け取りながら、強度を科学的な概念ではなく超越論的な原理として論じようとする。これは、「いかなる条件で、客観的な世界は新しさの主体的な生産つまり創造を可能にするか」という問題に対するドゥルーズによる解答である。またドゥルーズの強度の概念を、「非有機的な生命」としてとらえ直すことで、強度が生命と物質という二項対立を超えるより根源的な境位として位置づけられると見るのである。</p>			

る。

第4章では、「多様体multiplicité」の概念を扱う。『差異と反復』から『哲学とは何か』にいたる多様体概念の通史的考察によって、ドゥルーズの思想の変遷を浮かび上がらせるとともに、「生成変化」「此性」「固有名」「知覚しえないもの」といった『千のプラトー』における概念系を、主体や人称といった概念系とは異なる思考法のために生み出されたものとして位置づける。最終的に、ドゥルーズ的实在を潜在性と顕在性の両面を持つものとして提示するのである。

第5章は、分裂症というトピックをとりあげつつ、ドゥルーズとガタリの主体論を考察する。そのために「分裂症的コギトcogito schizophrénique」「集団的アレンジメントagencement collectif」といった概念を軸に、分裂症や精神病患者が、通常多くの人々にとって無意識にとどまるものを可視化するという点を明らかにしつつ、ドゥルーズとガタリ独自の無意識概念である「欲望」のありようを検討する。また『差異と反復』におけるカントやアルトーへの言及を、自己の内にひそむ〈他なるもの〉を明らかにするための言説としてとらえ直し、『アンチ・オイディプス』における妄想論へと接続しようとする。こうして、人間は3種類の線の交錯としてとらえられ、ふたりが提唱した「分裂性分析」とは、この線の錯綜の分析であるとする。

最後の第6章では、ドゥルーズとガタリの芸術論が取り上げられる。「芸術は人間を待たずに始まる」という『千のプラトー』の言葉に着目し、ふたりの芸術観を明らかにするとともに、彼らの自然哲学を美学的自然哲学として提示する。またドゥルーズの『プルーストとシーニュ』における芸術哲学と、晩年の『哲学とは何か』の芸術論を対照することで、一貫して芸術作品が、非物質的なものとみなされていることを明らかにするとともに、発生から生成変化へというドゥルーズの思想の変遷を芸術論という論点からも確認している。

以上の考察によって本論文は、ドゥルーズの哲学を、主体や人称、人格といった概念系とは異なる思考を打ちたてるものとして提示するとともに、みずから生成変化のブロックを形成し、此性をつくりだす実践としてとらえ直した。また、ドゥルーズにとっての实在とは潜在性と顕在性の両面からなるものであり、一切がそのあいだにおいて多様体の多様体として生起すること、分裂性分析とは、この潜在性と顕在性の関係性の分析、あるいは此性と人格、生成と存在の錯綜の分析に他ならないことが明らかになった。

(論文審査の結果の要旨)

20世紀フランスを代表する哲学者、ジル・ドゥルーズの哲学については、さまざまに論じられてきたし、いまなお論じられている。しかし、その哲学を扱うに当たっては基本的な困難が控えている。ひとつは、その著作の多くが特定の哲学者や作家に関する研究書であることであり、いまひとつは、重要な著作のいくつかが共同著作のスタイルをとっていることである。そのため、どこまでがドゥルーズの哲学であるのかが、不分明とならざるをえないのである。本論文では、ドゥルーズ単独の著作と共同著作とを区別しない。区別すること自体がドゥルーズの哲学に反するからである。しかし、特定の哲学者や作家に関する著作については、補助的なものとしてしか扱わない。なぜなら、そういった著作は、対象となった哲学者や作家を離れて扱えないからである。以上の理由により、本論文で主として取り上げるべき著作は『差異と反復』、『意味の論理学』、『シネマ1』、『シネマ2』、『アンチ・オイディプス』、『千のプラトー』、『哲学とは何か』、『ディアローグ』の8冊に絞られることになる。一見何でもないことのように思われるが、ドゥルーズの哲学を論じるに当たって、このように明確に範囲を絞ったことは、無視できない功績といえるだろう。というのも、従来のドゥルーズ論が、そのあたりを曖昧なままにしていたように思われるからである。

論文全体の立脚点として、非人称的個体化と前個体的特異性という論点を提示し、ドゥルーズの哲学が一貫して非人称的な「だれかon」の世界を論じる超越論哲学であることを、簡略ながら明快に示している。それにより、本論文の見通しがよくなるとともに、にぎにぎしい用語の百貨店というおもむきのあるドゥルーズ哲学自体の立ち位置も明瞭になるからである。

本論文の最大の功績は、潜在性と顕在性とのあいだに着目したところにあるだろう。ドゥルーズが1970年代前半までは潜在性から顕在性への一方通行を強調していたように思われるため、その立場は最後まで貫かれたかのように見られがちであった。しかし、パルネとの共著『ディアローグ』(1977年)をさかいに、潜在性と顕在性とのあいだの一方通行にとどまらない関係、相互作用ともいえる関係がクローズアップされるようになったと指摘する。ガタリとの共著に比すれば軽く見られがちだったパルネとの共著に、このように重要な転換点を見たことは、きわめて高く評価されねばなるまい。問題は、ドゥルーズにとってとりわけ重要な概念である多様体の理解にも関わってくる。というのも、1970年代前半まで多様体は、もっぱら潜在性のがわにあったといえるのに対して、パルネとの共著以降、多様体は潜在性と顕在性との両面に関わるものとされるからである。最晩年のドゥルーズが「哲学とは多様体の理論である」と言い切ったことを思えば、この点の重要性は、いくら強調しても強調しすぎることにはあるまい。

本論文のサブ・タイトルには、「多様体の論理と実践へ」とある。まさに、潜在性と顕在性のあいだに着目することが、実践にもつながるのである。その点をさらに補

強するべく、本論文は、ドゥルーズとガタリが提唱した分裂性分析を扱っている。そして、分裂性分析とは、潜在性と顕在性の関係性の分析に他ならないと結論づけるのである。

ただ、実践ということで想定されるはずの政治哲学的な側面について、本論文で触れられていないのは気になるところではある。とりわけ、国家装置と戦争機械の問題については、ぜひとも取りあげてほしかったように思う。もっとも、分裂性分析は、3種類の線、すなわち、二項対立的な切片性の線、分子状のリゾーム的な線、脱領土的な逃走線によって、個人と社会を分析する視座を示しており、そこから、国家装置と戦争機械の問題への筋道は、比較的容易にたどることができる。したがって、その問題の欠落は、本論文を評価するに当たって、さほど大きな欠陥とはいえない。

また、特定の哲学者や作家についての著作を補助的にしか扱わなかったことについて、そういった著作もまた、ガタリやパルネとの共同著作と同等の共同著作といえるのではないかという疑義も、審査の過程で出された。確かに、そういう側面もありはしようが、特定の哲学者についての論考で語ることが、そのままドゥルーズ自身の考えることといえないのも事実である。その点で、本論文がたとえばドゥルーズのスピノザ論とドゥルーズ哲学との違いに触れているのは、卓見といってよい。

このように本論文は、ドゥルーズの著作群の中から、彼の哲学として扱うべき著作を明確に絞った上で、ドゥルーズ哲学の勘所を剔抉して見せたことで、卓越したドゥルーズ論となりえている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月4日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降